いのちと地域を守る

急傾斜の避難経路 検証

要援護者支援も話し合う

避難訓練の後、住民や学校関係者、区役所の担当者ら11人が東日本大震災の被災者らと課題を検証した。

東粉浜小から高台の住吉中へ向かう避難経路には急傾斜の階段がある。高齢者や体が不自由な人には難所で、学校協議会委員の西田陽子さん(69)は「場合によっては、小学校にとどまる方がいいのではないか」と意見を述べた。

訓練は要援護者の避難支援もテーマ。障害者役の住民が車いすに乗り、近所の住民らが坂道で車いすを押すのを手伝った。地域見守り隊代表の増田真さん(69)は地区内に約150人の要支援者がいると説明。「避難の際、1人の要支援者に複数の支援者が必要になる想定の重要性に気付かされた」と語った。

東日本大震災の津波で母と祖母、曽祖母の3人を亡くした宮城教育大3年の赤間仁美さん(20)と、宮城県富谷町東向陽台小校長で、当時は南三陸町戸倉小校長だった麻生川敦さん(58)も話し合いに参加した。

赤間さんは「避難経路には道路の傾斜が急な所もあった。暗いと状況がよく分からないので、経路の事前確認も必要だと思う」と感想を述べた。麻生川さんは「自分(の頭の中)で全てを想定することはできない。実際に訓練を実施し、みんなで一つ一つ確認することが大切だ」と助言した。

住吉区は内陸部だが、南海トラフ巨大地震の津波などで5000人の犠牲が想定される住之江区に隣接。東粉浜連合振興町会長の播磨秀明さん(77)は「地区の防災と並行して、他地区からの避難者の受け入れ態勢も真剣に考える必要がある」と話した。

東粉浜地区は長年、大きな災害に見舞われず、住民の間には「ここは大丈夫」との意識もあるという。住吉区役所防災担当の平尾知香さん(25)は「想定(被害が小さいこと)を知らせるほど大丈夫と思われてしまう」と、防災広報の難しさを打ち明けた。

南海トラフ巨大地震で住吉区は震度6弱が想定され、揺れ対策も重要になる。減災・復興支援機構の木村拓郎理事長は「職員室を見たが、本棚の転倒、備品の落下が心配になった。教員らが無事でなければ、子どもたちは路頭に迷う」と備えを促した。

防災・減災ワークショップ
むすび塾
防災・減災ワークショップ
いのちと地域を守る
むすび塾

避難や要援護者支援など地域防災の課題を話し合う住民ら

防災啓発に力注ぐ

毎日放送 ラジオで「むすび塾」発信

「大阪むすび塾」を共催した毎日放送(大阪市)は防災啓発に力を入れるメディアとして知られる。阪神大震災の後、防災ラジオ番組「ネットワーク1・17」(月曜午後7時半から30分)を週1回、20年以上継続して放送している。

大阪むすび塾の内容は9日の放送で詳しくリポートしたほか、語り部の麻生川敦さんの電話インタビューを10月19日、赤間仁美さんのスタジオインタビューを11月2日に放送した。

キャスターの千葉猛さん(48)は仙台市出身。「今後も東日本大震災の教訓を伝え、犠牲を繰り返さないための呼び掛けに努めていきたい」と話している。

ネットワーク1・17の番組ホームページ(http://www.mbs1179.com/117_p/)の「ポッドキャスト」にアクセスすると、むすび塾分も含めて過去の放送内容が聴ける。

毎日放送ラジオ「ネットワーク1・17」のスタジオで収録の打ち合わせをする千葉さん(左)と赤間さん(右)

振り返って

参加住民 積極的に意見交わす

「この道はな、坂本龍馬が通ったんや」

大阪市住吉区東粉浜地区で10月30日、翌日の避難訓練の下見をしていた時、見知らぬ男性が教えてくれた。訓練当日に、狭い路地をうろうろしていると「何ですか」と2階から女性の声。人懐っこい土地柄だ。

防災教室で東粉浜小児童らは積極的に発言。避難訓練では、坂道や段差で車いすを押しながら、参加者はああした方がいい、こうすべきだとにぎやかだった。

東日本大震災では、事業所の社員が近隣の保育所に駆け付けたり、町内会役員らがお年寄り宅を訪ねたりして、要援護者の避難に一役買った。これらの共助は、日頃の近所付き合いが土台になっていた。

震災後、全国各地で町内会などが安否確認や避難誘導の体制を整えている。災害発生時に少しでも円滑に事を進める鍵の一つは、住民のコミュニケーション。気軽に声を掛け合える東粉浜は、防災の潜在能力が高いだろう。

懸念される南海トラフ巨大地震に備え、地域は震災から何かを学ぼうという機運が盛り上がっていた。震災の教訓を伝えることの大切さもあらためて感じた。

（報道部・須藤宣毅）

■むすび塾に参加して ―― 大阪・住吉区東粉浜小

【今後の課題】 地域に要支援の高齢者は多いが、若い人たちは日中いない。昼は高齢者同士で助け合わざるを得ない。

＝東粉浜連合振興町会副会長・北原隆さん(74)

【訓練を終えて】 車いすを使った初めての訓練だった。実際に行動し、要援護者を救助する大変さを再認識した。

＝東粉浜連合振興町会連絡役・薮本雅章さん(63)

【今後の課題】 1人で車いすを押すのが大変な場合もある。要支援者の避難には、複数の住民で当たることが大切だと分かった。

＝地域見守り隊代表・増田真さん(69)

【今後の課題】 訓練のように冷静に避難階段を上れるだろうか。鉄製の踊り場は腐っていた箇所もあり、大人が大勢乗った時に心配だ。

＝東粉浜小PTA会長・安藤克司さん(46)

【今後の課題】 行政として想定外はあり得るという危機感を持った訓練を考えたい。東粉浜地域の取り組みを他の地域にも伝えたい。

＝住吉区役所防災担当・平尾知香さん(25)

【参加して】 解決しなければいけない課題が具体的に見えてきた。子どもたちが自分の身を自分で守れるようにすることが大きな目標だ。

＝東粉浜小校長・羽川昌広さん(63)

東日本大震災の語り部から

宮城県富谷町東向陽台小校長
麻生川　敦さん(58)

想定外も想定を

東日本大震災の発生時は南三陸町戸倉小の校長だった。地震発生直後に全員が高台に避難した。地震が起きたら津波を思い起こし、高台に逃げることは地域で代々受け継がれ、一人一人に身に付いた想定だった。

ただ、想定を信頼しきると落とし穴になる。津波が来ないとされていた校舎屋上も津波にのまれ、高台にも迫った。想定外まで想定し、臨機応変に判断できるかが問われる。訓練を繰り返し、想定の不備や曖昧さを知ることで可能になる。

避難に際し、地域の人々のまとまりが大きな力になる。地域の絆があるかどうかで避難のスピードが変わる。何を想定し、どう備えるかを共有するために、きょうのように集まって話し合うことがとても大切だ。

宮城教育大3年
赤間　仁美さん(20)

自分の命大事に

東日本大震災発生当時は海に面した名取市閖上に住んでいて、母、祖母、曽祖母を津波で失った。地域では約750人が亡くなった。

犠牲者が多かった原因は四つ考えられる。

一つ目は防災無線の故障で避難指示の放送が流れなかったのに、市職員が気づいていなかった。二つ目は沿岸部にもかかわらず津波への意識が低く、津波の避難訓練をしていなかった。三つ目は指定避難場所の選定が不十分で、再避難する際に津波に巻き込まれた人がいた。最後は家族の帰りを自宅で待つなどして逃げ遅れた人が多かった。

家族で連絡が取れなくなった時の対応策を事前に決めておくことが大事だ。他人を守ろうとして、自分の命を落としてはいけない。

石巻西高2年
志野ほのかさん(16)

逃げ場所決めて

当時は東松島市野蒜小の6年生で、震災発生後、体育館に避難した。指定避難所にもかかわらず、1時間後に津波が来て十数人が亡くなった。避難所にとどまらず、臨機応変に高いところに移動することを心掛けないといけない。

祖父は自宅前で私の帰りを待っていて津波に襲われた。「自分はここに逃げるから迎えに来ないで」というように家族で話し合い、逃げる場所を決めることが大事だ。

震災前、大きな災害は起きないだろうと思っていた。でも野蒜地区では住民5000人のうち、500人が亡くなった。悲しい思いを大阪の人たちに繰り返してほしくない。物を失っても命は失わないようにしてほしい。

（ビデオ参加）

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に、地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

次回の「むすび塾」は24日、塩釜市の浦戸小中学校で開催します。